

体験学習プログラムにおける効果的な事後学習に関する考察：海外サービス・ラーニングプログラムの活動まとめの分析から

著者	山本 秀樹
雑誌名	教育総合研究叢書 = Studies on education
号	11
ページ	135-145
発行年	2018-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000532/

体験学習プログラムにおける効果的な事後学習に関する考察
ー海外サービス・ラーニングプログラムの活動まとめの分析からー

A Study on Effective Post-Learning in International Service Learning Program :
Analyzing Student Learning Outcomes

山本 秀樹 *
Hideki YAMAMOTO

抄 録

体験学習プログラムで学びを深めさせる方法について、事後学習のプロセスと科目の目標との意識付け・関連付けに着目し、プログラムの改善に取り組んだ。研究では、2016年度と2017年度の夏期に実施した海外サービス・ラーニングプログラムを取り上げ、学びの総括である「活動まとめ」を統計的に分析・比較することで、事後学習の効果と課題を明らかにした。

1. 研究目的

サービス・ラーニングは、インパクトある教育実践の一つである¹。文部科学省では、サービス・ラーニングを「教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム。」とし、サービス・ラーニングの導入によって、「①専門教育を通して獲得した専門的な知識・技能の現実社会で実際に活用できる知識・技能への変化、②将来の職業について考える機会の付与、③自らの社会的役割を意識することによる、市民として必要な資質・能力の向上」などの効果が期待できると説明している²。サービス・ラーニングの教育的効果やふりかえりの構造化については、関西国際大学で実施しているプログラムでも、学生の自己評価やふりかえりの記録をもとに、いくつかの検証が行われてきたところである（山本 2010；尾崎・山本 2011；山田・尾崎 2013；丹羽・尾崎・山田 2014；山本 2016）。

学生が体験を通して、深い学びへと歩みを進めていくためには、学びの文脈において体験から学んだことをいかに言語化していくかが肝要である。筆者による分析では、サービス・ラーニングの総括として位置付けている「活動まとめ」を見ると、ジェネリックスキルの獲得に関しては、おおむね学びを得ている様子が見られたが、学修目標の達成といったアカデミックな学びの関連付けに乏しいことがわかった³。学生の立場からは、体験学習のメインイベントでもある期中活動がやっと終了したことで、満足感とともに何か大事なことを「学んだ気」になってしまっていることも否めない。あわせて、自ら没入したインパクトの強い体験ほど、その時に受けた衝撃そのものに囚われてしまう傾向が強く、「活動まとめ」の記述も「描写的なふりかえり」⁴にとどまる

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

ことが多い。そこで、それら要因を事後学習のプロセスと科目の目標との意識付け・関連付けに求め、プログラムの改善に取り組んだ。本稿では、2017 年度で取り組んだ「グローバルスタディ・フィリピン/セブ」の事後学習が、科目の目標達成にどのように作用したのかについて、2016 年度と 2017 年度の実践結果をテキストマイニングの手法を用いて分析・比較し、効果的な事後学習のあり方について検討することを目的とする。

2. プログラムの概要

(1) 科目の内容

「グローバルスタディ・フィリピン/セブ」は、海外サービス・ラーニングプログラムとして、関西国際大学の全学の 2 年生以上を対象に開講している。

学修テーマは、「世界に広げる日本の『安全・安心』～より良い生活環境の構築を目指す教育支援」である。学修目標は、「都市と地方の経済格差の実態と貧困を助長するメカニズムについて、教育・福祉的観点から理解する」「山間部のコミュニティにおける安全・安心な暮らしに資する貢献可能性を考えていく」とし、獲得を目指すジェネリックスキル⁵を「心豊かな世界市民になる」「問題解決能力を身につける」「コミュニケーション能力を身につける」とした（表 1）。

事前学習を 16 回実施した後、期中活動として現地に 3 週間滞在し、フードフィーディング（給食）や衛生教育、バディ（地元ユース）との協働作業等の貢献活動に取り組んだ。帰国後は事後学習を経て、学びの総括として「活動まとめ」を提出させた。

（表 1）科目の概要

科目	グローバルスタディ・フィリピン/セブ
テーマ	世界に広げる日本の「安全・安心」～より良い生活環境の構築を目指す教育支援
概要	貧困と格差社会における安心・安全な暮らしについて、フィリピン・セブ島のバランガイ（村落）でのサービス・ラーニングを通して考えていく。プログラムでは、山間部にあるバランガイで生活する人々と、日常的な交流を深めていながら、現地のニーズに基づいた様々な貢献活動に取り組んでいく。都市と地方の経済格差の実態と貧困を助長するメカニズムを、おもに教育・福祉的観点から理解をすすめる、山間部のコミュニティにおける安全・安心な暮らしに資する貢献可能性を考えていく。
学修目標	① 都市と地方の経済格差の実態と貧困を助長するメカニズムについて、教育・福祉的観点から理解する。 ② 山間部のコミュニティにおける安全・安心な暮らしに資する貢献可能性を考える。
目標とするジェネリックスキル	① 多様性理解 このクラスを選択したメンバーや現地で知り合った人々が持つ価値観や社会的・文化的背景を尊重したかわりができる。 ② 問題発見力 自分たちの取り組みを継続的にモニターし、予防的観点から課題を見出し、目標達成に向けた発展的な解決策を導き出すことができる。 ③ 計画・実行力

	<p>現地での貢献活動の効果を測定し、必要に応じて活動計画の修正を図りながら取り組むことができる。</p> <p>④ 意見交換・調整力</p> <p>積極的かつ柔軟にコミュニケーションをとって、共感的な理解や受容的な態度のもとに相互に協働できる関係を築いていくことができる。</p>
--	---

（２）成績評価の方法

事前学習では、レポートと活動計画案で 20%とし、期中活動の活動日誌を 30%とした。事後学習については、2016 年度は発表用スライドが 20%と活動まとめを 30%とし、2017 年度には小レポートと活動まとめで 50%とした（表 2）。

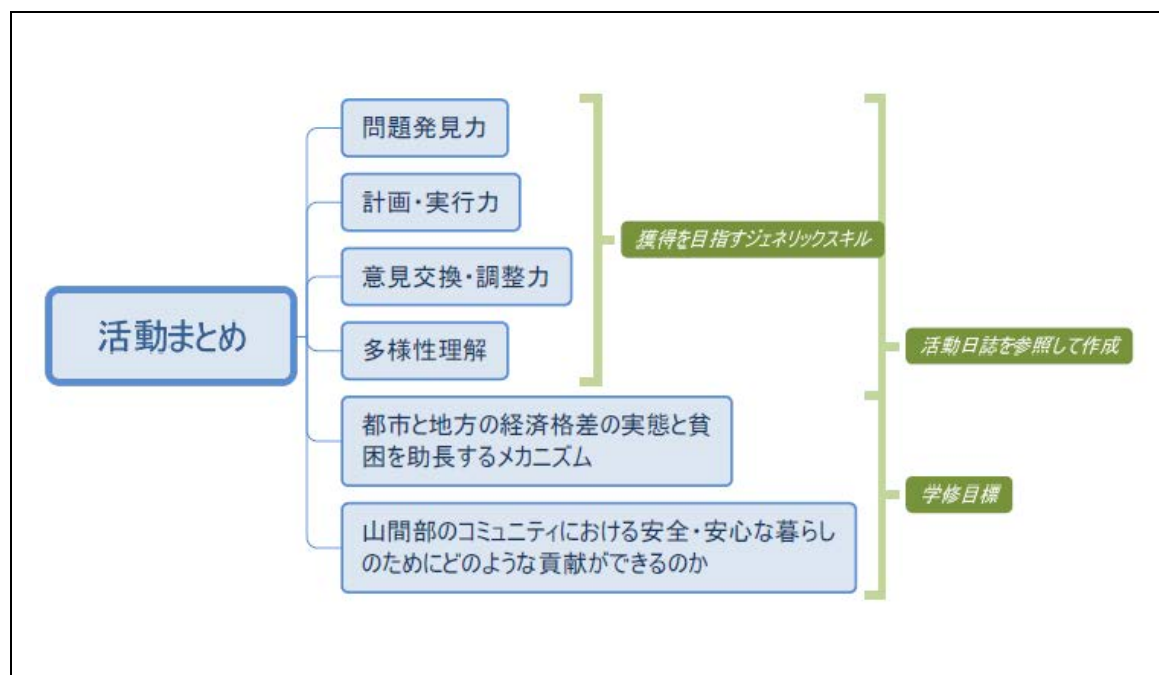
（表 2）成績評価の方法

	2016 年度	2017 年度
事前学習	<p>レポート：10%</p> <p>活動計画案：10%</p>	<p>レポート：10%</p> <p>活動計画案：10%</p>
期中活動	活動日誌：30%	活動日誌：30%
事後学習	<p>発表用スライド：20%</p> <p>活動まとめ：30%</p>	<p>小レポート・活動まとめ：50%</p> <p>*発表用スライドは選抜メンバーによる</p>

（３）事後学習の構造

これまでのプログラム内容との大きな変更点は、「活動まとめ」に至るふりかえりのプロセスに、学修目標とジェネリックスキルの獲得を意図させる小レポートを構造化したことである（図 1）。

（図 1）事後学習の構造（2017 年度）



2016 年度のプログラムでは、帰国後に学びの総括に向けた全体の事後学習を 1 回実施した。具体的には、プレゼンテーション用のスライドづくりを全てのメンバーで取り組んで、ふりかえりを深めるよう指導した。「活動まとめ」はそれら総括として、「活動は円滑にできたか」「活動結果について」「その他」の 3 つの観点で、期中活動記録を参照しながら、この科目で設定している学修目標や獲得を目指すジェネリックスキルを意識した上でまとめさせた。

一方、2017 年度のプログラムでは、帰国後から 2 週間おきに、学修目標と獲得を目指すジェネリックスキルをキーワードとした 6 回の小レポートを課した。プレゼンテーション用のスライド作成は選抜メンバーとすることで、極力レポート作成に注力できるようにした。小レポートは学修目標とジェネリックスキルをキーワードに構成し、活動日誌を参照しながら作成させ、体験したことの言語化とふりかえりの深まりを促した（表 3）。「活動まとめ」は、小レポートを総括したものとして設定し、プログラムを通して学んだ事をもとに、「フィリピン・セブ島の貧困と格差社会におけるグローバル化の関連」「安全・安心な暮らしのための実現可能な貢献のあり方」「グローバル社会を生きていくために必要な力」の 3 つの観点でまとめさせた（表 4）。「活動まとめ」では、文字数はあえて指定せずに、自律的に、この科目の総括として納得のできる相応しい分量を自己決定できるようにしている。結果として、2016 年度は最小 398 字、最大 6486 字、平均 2529 字であったが、2017 年度は最小 1927 字、最大 8078 字、平均 4217 字となった。

（表 3）事後学習の比較

	2016 年度	2017 年度
内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 活動日誌を参照しながら「活動まとめ」に向けた指導（全体で 1 回） ● プレゼンテーション用のスライド作成（全てのメンバー） 	<ul style="list-style-type: none"> ● 学修目標と獲得を目指すジェネリックスキルをキーワードとした小レポート（6 回） ● プレゼンテーション用のスライド作成（選抜メンバー）
「活動まとめ」のテーマ	「活動は円滑にできたか」「活動結果について」「その他」の 3 つの観点で、事前学習のレポートおよび期中活動記録を参照し、この科目で設定している学修目標や獲得を目指すジェネリックスキルを意識した上で、これまでの取り組みを総括的にふりかえる。	グローバルスタディで学んだ事をもとに、①とりわけフィリピン・セブ島の貧困と格差社会が、グローバル化とどのように関連しているのかを明らかにし、②それら環境における安全・安心な暮らしのための実現可能な貢献のあり方を示しなさい。③あわせて、グローバル社会を生きていくために必要な力を検討し、あなた自身がどう取り組むか、どのような貢献ができるのかについて論述しなさい。

（表 4）事後学習の小レポートの項目例（2017 年度）

<ul style="list-style-type: none"> ● ジェネリックスキル：「問題発見力」
<ol style="list-style-type: none"> 1. 期中活動で「問題発見力」に関するエピソードを抜き出ささい。また、自分がとった行動の内容、意図を具体的に記入しなさい。

2. 「問題発見力」を通して学んだことを記述しなさい。また、それはあなたにとってどのような意味があるのかを考えなさい。
 3. 「問題発見力」から学んだことを、次にどのようにすれば活かしていくことができるのかを考えなさい。
- 学修目標：「都市と地方の経済格差の実態と貧困を助長するメカニズム」
 1. 事前学習と期中活動を通して、都市と地方の経済格差の実態と貧困を助長するメカニズムについて、教育・福祉的観点から理解できたことのエピソードを抜き出さなさい。
 2. 都市と地方の経済格差の実態と貧困を助長するメカニズムについて、教育・福祉的観点から理解できたことは、あなたにとってどのような意味があるのかを考えなさい。
 3. 都市と地方の経済格差の実態と貧困を助長するメカニズムについて、教育・福祉的観点から理解できたことを、次にどのようにすれば発展・展開させることができるのかを考えなさい。

3. 研究方法

（1）調査対象と分析対象とするデータ

2016 年度のプログラムに参加した学生 18 名、2017 年度のプログラムに参加した学生 23 名による、事後学習のレポート「活動まとめ」を比較分析の対象として用いる。「活動まとめ」は、このプログラムを通して学んだことについて、学生が総括的に言語化したものである。

（2）分析方法

まず、「活動まとめ」の内容の確認を行った。Microsoft の Word2016 の文章校正機能を用い、文書のスタイルを「通常の文」に設定し、主に「表記のゆれ」を点検した。次に、文脈上手を加えても問題のない範囲で修正を行い、テキストデータ化した。そして、それらデータを、テキストデータを統計的に分析するためのフリーソフトウェアである KH Coder (version2) ⁶ を用いて分析した。

（3）倫理的配慮

この研究は、関西国際大学研究倫理委員会の承認を得て実施したものである。受講生には、「関西国際大学における人を対象とする研究倫理指針」に基づいて事前の口頭説明を行い、授業の成果物を研究に利用することの同意を得た。

4. 結果

（1）頻出する単語

「活動まとめ」の分析に使用する語の取捨選択で「フードフィーディング（給食）」「サイバーセックス」は強制抽出とした。テキストデータの総抽出語数は、2016 年度は 27,425 であり、異なり語数は 2,129 となった。一方、2017 年度では総抽出語数 57,963、異なり語数 3,751 となった。

表 5 は「活動まとめ」の抽出語リストの頻出 30 語の 2016 年度と 2017 年度の比較である。2016 年度の頻出語を見ると「授業」「活動」「フードフィーディング（給食）」「フィリピン」「現地」と期中活動の内容に関する単語、「子ども」「バディ（地元ユース）」「人」といった活動の対象者に

関する単語が抽出された。2017 年度の頻出語からは、「フィリピン」「貧困」「グローバル」「教育」「社会」「格差」といった、活動先の環境に関する単語と活動対象となった「子ども」「人」があった。期中活動に体験したことを通して得られた解釈を言語化しようとしていることがわかる。

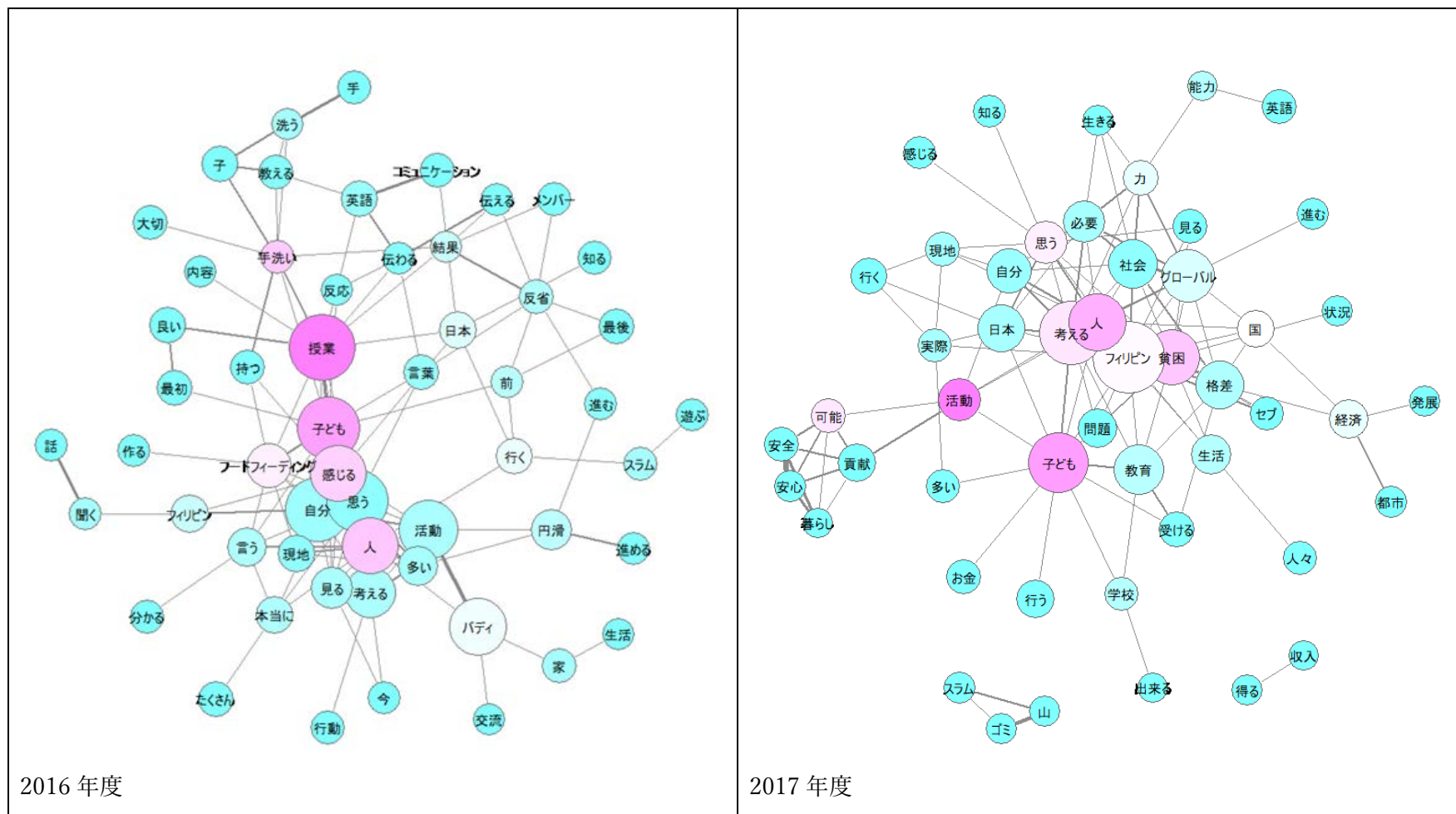
（表 5）活動まとめの抽出語リスト頻出 30 語（出現回数順）の比較

2016年度		2017年度	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
授業	165	フィリピン	335
自分	157	考える	280
子ども	147	子ども	251
思う	145	人	236
活動	134	貧困	220
バディ	125	グローバル	207
感じる	120	教育	184
人	120	社会	178
考える	99	格差	174
フードフィーディング	71	日本	162
見る	63	自分	143
円滑	57	活動	135
多い	55	思う	134
言う	49	必要	130
フィリピン	48	生活	113
現地	43	経済	109
本当に	43	問題	109
日本	42	貢献	104
英語	38	行う	103
行く	38	国	95
子	37	行く	90
良い	37	力	87
たくさん	36	受ける	84
言葉	36	安全	80
最初	36	見る	80
行う	34	お金	79
最後	34	可能	79
家	33	英語	76
教える	33	現地	76
時間	32	セブ	75

（2）共起ネットワーク

図 2 は、「活動まとめ」の共起ネットワーク図である。集計単位を「段落」とし、品詞による語の取捨選択はデフォルト、描画数は 120 で設定した。出現パターンの似通った単語を線で結んでおり、強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い単語ほど大きい円で描画している。また、中心性が高い単語ほど色が濃くなっている。

2016 年度の共起ネットワークを見ると、頻出語であり中心性をもった単語からは、「子ども」に対して取り組んだ貢献活動であり、とりわけエネルギーを費やしたと思われる「授業（衛生に関する教育支援）」および「フードフィーディング（給食）」から「自分」が「感じた」「思った」ことを言語化していることがわかる。2017 年度になると、「フィリピン」という環境で、「子ども」を対象とした「活動」を通して「貧困」と「人」のありようについて、「考える」ことに力点が置かれていることがわかる。2016 年度では中心を構成していた「自分」の単語が、2017 年度ではやや周辺化されていることも特徴的である。



(図2)「活動まとめ」の共起ネットワークの比較

(3) 項目ごとの書き分け

「活動まとめ」で指示した3つの観点について、学生がどう書き分けているのかを見る。表6は、それぞれの項目に特徴的な単語を抽出したものであり、頻出語句とは異なる。

2016年度では「活動は円滑にできたか」という項目では、「円滑」「活動」「フードフィードリング（給食）」「授業」といった活動に関連する単語が見られ、貢献活動そのものを記述していることがわかる。「活動結果について」は、「感じる」「思う」「考える」といった自己内省に関連した単語が見られ、活動を通した学びの成果に関する記述をしていることがわかる。「その他」には「ダンプ」「サイト」「スラム」といった現地で見学した場所に関連する単語が見られ、それぞれの項目ごとに書き分けようとしていることがわかる。

2017年度を見ると、「フィリピン・セブ島の貧困と格差社会におけるグローバル化の関連」では「フィリピン」「格差」「貧困」「グローバル」と期中活動で学んだことの一般化した内容を記述しようとしていることがわかる。「安全・安心な暮らしのための実現可能な貢献のあり方」では、「子ども」を通して「安全」や「教育」の「貢献」のあり方を「考える」といった、期中活動で取り組んだ貢献活動の内容をもとに記述している。「グローバル社会を生きていくために必要な力」では、「自分」にとって「社会」を生き抜くために「必要」な力について、我がこととして「考える」様子が見えてくる。「安全・安心な暮らしのための実現可能な貢献のあり方」と「グローバル社会を生きていくために必要な力」の二つの項目で、ともに「考える」がキーワードになっていることがわかる。

(表6)「活動まとめ」の項目ごとに特徴的な単語

2016年度

円滑にできたか		活動結果		その他	
円滑	.556	感じる	.387	ダンプ	.194
活動	.366	人	.323	サイト	.194
フードフィードリング	.250	子ども	.316	フィリピン	.186
自分	.244	思う	.313	スラム	.171
バディ	.237	考える	.258	思う	.169
授業	.228	見る	.246	人	.163
多い	.202	バディ	.237	孤児	.162
重ねる	.188	本当に	.233	格差	.147
進める	.188	日本	.208	話す	.146
最初	.180	持つ	.188	他	.135

2017年度

フィリピン・セブ島の貧困と格差社会におけるグローバル化の関連		安全・安心な暮らしのための実現可能な貢献のあり方		グローバル社会を生きていくために必要な力	
フィリピン	.177	子ども	.161	自分	.148
格差	.156	考える	.125	考える	.145
貧困	.143	安全	.095	社会	.134
グローバル	.131	教育	.085	必要	.126
経済	.110	貢献	.081	グローバル	.121
教育	.080	日本	.076	人	.105
セブ	.077	安心	.071	思う	.098
社会	.075	行う	.071	力	.096
国	.072	活動	.067	英語	.084
生活	.070	問題	.063	活動	.080

5. 考察

2016 年度と 2017 年度プログラムの大きな変更点は、「活動まとめ」に至るプロセスの構造化である。これら複数年度の「活動まとめ」を統計的に分析し、比較することで明らかになった事後学習の効果と課題について示す。

効果として確認できたのは、「活動まとめ」の量と質の変化である。まず、記述できた量の変化である。どちらの年度とも「活動まとめ」に文字数は指定していなかったが、2016 年度では平均 2529 字であったものが、2017 年度では平均 4217 字となった。体験した内容はほぼ同じであるにもかかわらず、記述量が増えたということは、書くことの力量や、書き進めることができるだけの材料があったことに他ならない。事後学習として課した小レポートは 2 週間ごとに計 6 回実施し、「活動まとめ」はそれらを総括したものとして位置付けた。学修目標とジェネリックスキルの達成を意図した小レポートを構造化したことで、学生にとって体験したことの何を言語化すべきなのかわかりやすく、また複数回にわたって書くことで、「書きなれる」といった効果もあっただろう。多くの学生は、普段から相当量を書けるだけの力量を持ち合わせてはおらず、定期的且つ繰り返しのレポート作成によって、書くことの力がついたものと考えられる。「活動まとめ」はそれら小レポートを総括したものであるため、結果的にしっかりとした記述量となったこと想像に難くない。

次に記述した内容、質的部分の変化である。これまでの「活動まとめ」では、期中活動のインパクトが強く、事前学習や事後学習で学んだ事を結び付けて上手に言語化できていないことが多かった。帰国後は、体験したことの熱を帯びた状態で、話すことや書くことは感情的なものに終始してしまう傾向があり、2016 年度の記述には「感じる」「思う」といった単語が多くみられた。一方、2017 年度の「活動まとめ」では、「考える」という表現に変化しており、記述した内容が感情レベルから思考レベルへと遷移していることが推察できる。つまり、「活動のまとめ」までの複数回の小レポートによって、体験したことの熱をクールダウンさせ、出来事の内側に入り込んで自分を外側へ置きなおし、ある程度、世界を複眼的に捉えなおすことに繋がったのではないだろうか。今回の取り組みでは、「活動まとめ」に至るプロセスを文脈立てで構成し、さらに「活動まとめ」に書くべき観点を学修目標とジェネリックスキルに関連付けて具体的に提示した。その結果、単に体験したこと、感じたことに終始することなく、学修目標とジェネリックスキルをバランスよく記述でき、ある程度、科目で掲げた目標達成に近いまとめができたのではないだろうか。

課題としては、そもそも事後学習の量が、学生にとって過負担になっていなかったかということである。プログラムは 6 月にはじまり、3 週間の期中活動を終え、帰国してからは事後学習として 2 週間おきに 6 回の小レポートを提出した。最終的に「活動まとめ」を提出したのは年をまたいだ 1 月末日となった。関西国際大学においても半期集中型の履修方法が一般的である中、ほぼ通年に渡って科目を開講することは、学生や教員にとってもモチベーションを維持するだけのエネルギーが必要である。また、学修目標が 2 つジェネリックスキルは 4 つと、多くの目標を立てたため全体的にわかりにくく、それらを明確にす

るためのレポートが乱立してしまったきらいはある。学生の中にはレポートの多さに困惑し、他科目で出される課題も相まって、レポートに追われる状況もあった。学生に多く書かせることの効果は既述の通りであるが、体験したことの言語化には「書く」こと以外にも「話す」方法もある。学び方の多様性を考えるのであれば、レポート以外の方法も組み入れて構造化することも必要だったのかもしれない。

¹ AAC&U High-Impact Educational Practices <https://www.aacu.org/leap/hips> (2018. 2. 10)

² 中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」用語集

³ 山本 2017 を参照のこと。

⁴ 和栗 2010 を参照のこと。

⁵ 「KUIS 学修ベンチマーク」関西国際大学では卒業までに獲得を目指すジェネリックスキルを、「自律的な人間」「社会貢献できる人間」「国際性を身につけた人間」の3つの態度的能力と、「問題解決能力」「コミュニケーション能力」の2つの能力の合わせて5つの大項目で示している。

⁶ 立命館大学産業社会学部の樋口耕一氏が開発したテキストマイニングのためのフリーソフトウェア <http://khc.sourceforge.net/> (2018. 2. 10)

参考文献

1. 和栗百恵. (2010). 「『ふりかえり』と学修：大学教育におけるふりかえり支援のために」『国立教育政策研究所紀要』第139集
2. 山本秀樹. (2010). 「ジェネリックスキルの獲得に向けた大学教育プログラムの研究」『関西国際大学研究紀要』11
3. 尾崎慶太・山本秀樹. (2011). 「教育効果と地域貢献を高めるためのサービスマーケティングの研究—海外サービスマーケティング（カンボジア）のプログラム分析を通して—」『教育総合研究叢書』4
4. 山田一隆・尾崎慶太. (2013). 「サービスマーケティング受講を契機とした大学生の態度特性変化—活動の随意性に注目して—」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』22
5. 丹羽恵理・尾崎慶太・山田一隆. (2014). 「大学初年次におけるサービスマーケティング受講を契機とした態度特性変化その6—自然言語分析ツールを用いたふりかえりシートの分析の試み—」『日本福祉教育・ボランティア学習学会 第20回大会とうきょう大会予稿集』
6. 和栗百恵. (2015). 「サービス・ラーニングとリフレクション：目的と手段の再検討のために」『国際ボランティア学会ボランティア学研究』Vol. 15
7. 山本秀樹. (2016). 「体験学習プログラムにおけるジェネリックスキルの獲得と学生の自己評価に関する一考察」『教育総合研究叢書』9
8. 山本秀樹. (2017). 「体験学習プログラムにおける『まとめ』に関する考察—サービス・ラーニングプログラムの活動まとめの分析から—」『教育総合研究叢書』10

Abstract

About the method of active learning with the experience learning program, I focused on the consciousness and relevance of the post-learning process and learning goals. In this report considers effective method of post-learning, by taking a service-learning program implemented in the summer of 2016 and 2017, statistically analyzing and comparing "final report" which is the student learning outcomes.